SCカフェ　vol.11　　2023.7.13

第2部「移動支援」
住民主体の移動支援、どう見えていますか？

NPO法人
全国移動サービスネットワーク

事務局長　伊藤みどり

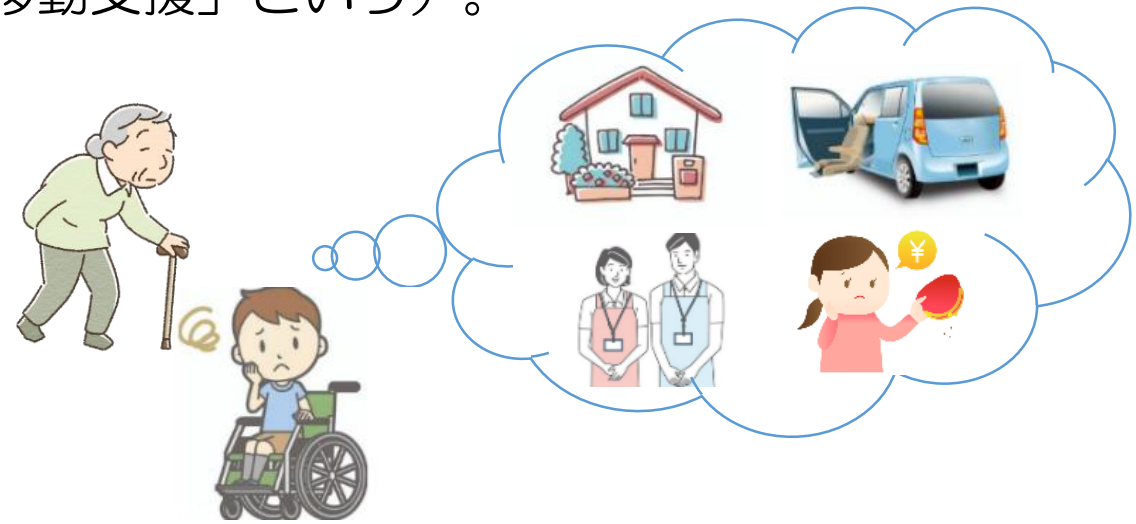
住民主体の移動支援とは　～背景～

- 「移動支援」とは、何らかの理由により移動に困難を伴う人を対象に、自動車を使って外出の支援を行うサービス

- 高齢化の進展に伴って、独力で移動・外出することが難しい高齢者が増加し、各地で移動手段の確保が課題となっている。
  →介護給付費の増要因も…

- そのような中、住民自らが担い手となって様々な移動支援（自家用有償旅客運送や許可・登録不要の移動支援など）が行われている（以下、「住民主体の移動支援」という）。

★住環境要因
★交通環境要因
★人的要因
★経済的要因



住民主体の移動支援の実際　～特徴～

- 多くが個人のニーズに対応する形（小規模・臨機応変）で実施される。事業化されていない場合も多い。
- ドア・ツー・ドア、または自宅のすぐ近くで乗車し目的地で降車するしくみを取っていることが多く、ボランティアが運転や付き添いを担っている。
- 全ての移動手段を担うものではないが、通院や買い物、高齢者のサロン等の居場所の送迎などによって、暮らしを支えている。
- 送迎のみでなく、申込時の聞き取りを通じた生活課題の把握、乗り合って出かけることによる交流の場づくりも行われている。

住民主体の移動支援　～増えているタイプ～

住民の車　社福の車　市の車

住民がｻｰﾋﾞｽ調整

住民ﾄﾞﾗｲﾊﾞｰ　社福のドライバー

1．住民などが手弁当で運行
①乗り合ってサロンや買い物などに出かける
②生活支援の一部として通院や買い物を支援

2．市町村の車（保険付）で住民が運行

3．社会福祉法人等が公益的な取組として
車両や運転者を提供
または住民が運転して買い物やサロンへ

4．介護予防・日常生活支援総合事業の補助金
を活用して１～３の方法で運行

利用者の制限はない

許可や登録の手続き不要の形態で行われていることが多い

運賃にあたる金銭は受け取れない

住民主体の移動支援の目的は？効果は？

- 公共交通が衰退し、市町村が交通施策としてコミュニティバスやオンデマンド交通を運行している地域においても、サービスは不足している。
- 移動手段の選択肢の一つとして、住民主体の移動支援が高齢者の暮らしを維持する上で必要不可欠となっている。

隣の市には行けない・・・

乗降場所が限られている・・・

「移動支援、必要だよね！大事ですね！」というけれど、
「移動支援に取り組むと、暮らしはどう変わるの？」
「運転免許を返納できる？」と聞かれたら…。

▼どこにでも行けて、安くて便利なサービスがあれば、免許返納できるけど、それって安いタクシー？民業圧迫かも？制限が必要では？
▼福祉行政としては、本来は交通施策で対応することだし、財政難だし、積極的に支援はできない・・・

万能なサービスは住民主体では作れないし、交通サービスではないのに、色々考えていると、迷子になりがち。
↑
目的や効果がはっきりしないからでは？？？

車で送迎するだけの機能や効果があるのではないか？

例えば、利用者に対する効果は…

移動支援サービス

社会参加が叶わず…

QOLやADLがダウン！！
医療費・介護給付費が増加

社会参加（関係性の再構築）を実現！

移動支援（誘い出し、社会資源へのつなぎ、信頼関係外出・交流を促す一連の活動）

住民主体の移動支援が高齢者の介護予防にもたらす効果に関する調査研究

＜調査１＞移動支援の利用者および 担い手への定量的・定性的調査
＜調査２＞利用者への移動支援の機能に関するヒアリング調査
＜調査３＞移動支援を利用している要支援者等と利用していない
要支援者等の変化の比較分析

	調査客体	主な属性	数	求める結果
調査1	①利用者	①要介護者、要支援者 基本CL該当者、いずれにも非該当の高齢者	203人	どのような人がどのように変化するか。 利用者と担い手にどのような良い変化があらわれるかを見つける 目的変数を探る
	②運転ボランティア	②65歳以上の人	94人	
調査2	①利用者	①要介護者、要支援者 基本CL該当者、いずれにも非該当の高齢者	9事例 （8市町村）	どのような機能によって、利用者と担い手に変化が起きるかを洗い出す なぜ効果があるのかを検討する
	②運転ボランティア	②65歳以上の人		
調査3	①移動支援の利用者と非利用者	①要支援者、基本CL該当者、いずれにも非該当の高齢者	２自治体（愛知県豊明市、大分県国東市）	対象群を置くことにより、移動支援による効果の有無を明らかにする その効果を測る
	②「健康とくらしの調査2010」の回答者	②要支援者、基本CL該当者、いずれにも非該当の高齢者	豊明市在住の8,145人	

＜調査１＞移動支援の利用者および 担い手への定量的・定性的調査

＜概要＞

既存の移動支援の実施団体に対し、新規の利用希望者を対象とするアンケート調査票を配布し、利用開始前と開始から数か月が経過した時点での意識や行動についての変化を把握した。同様に、新規に活動を開始するボランティアに対してもアンケート調査票を配布し、数カ月後の変化を見た。

※調査票は、基本属性、外出に関する状況、うつやQOLに関する尺度として利用される評価指標（質問項目）で構成

＜調査票の配布協力団体＞

・32都道府県の115団体（以下の条件に合致している団体）※332団体に郵送

・高齢者を対象として、①福祉有償運送、②交通空白地有償運送、③登録不要の移動支援、のいずれかを実施している団体で、運転者または添乗者をボランティアが担っている団体

＜調査対象と配布方法＞

回答期間中に以下に該当する方がいた場合、調査票を配布し、各団体で取りまとめてご返送いただいた

・利用者用アンケート ⇒ これから利用を開始する予定で、65歳以上の方

・担い手用アンケート ⇒ ボランティアとして運転または添乗を開始する予定で、65歳以上の方

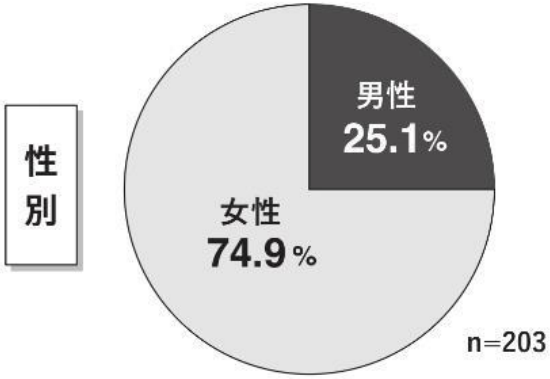
＜回答結果＞

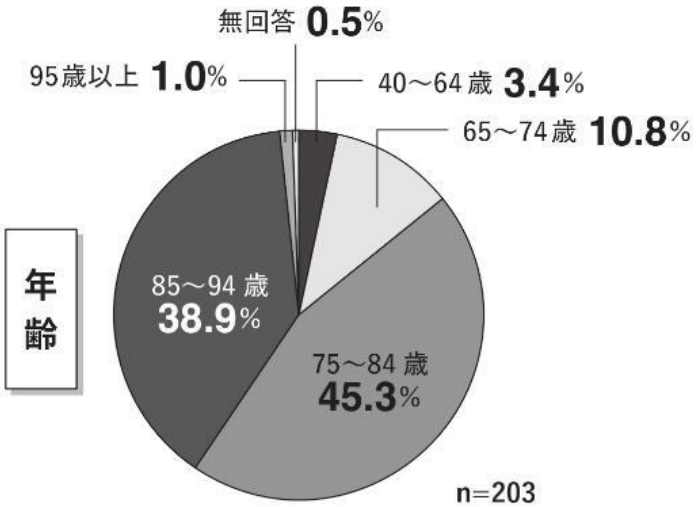
1回目（2021年10月～12月）および2回目（2022年8～9月）の回答数

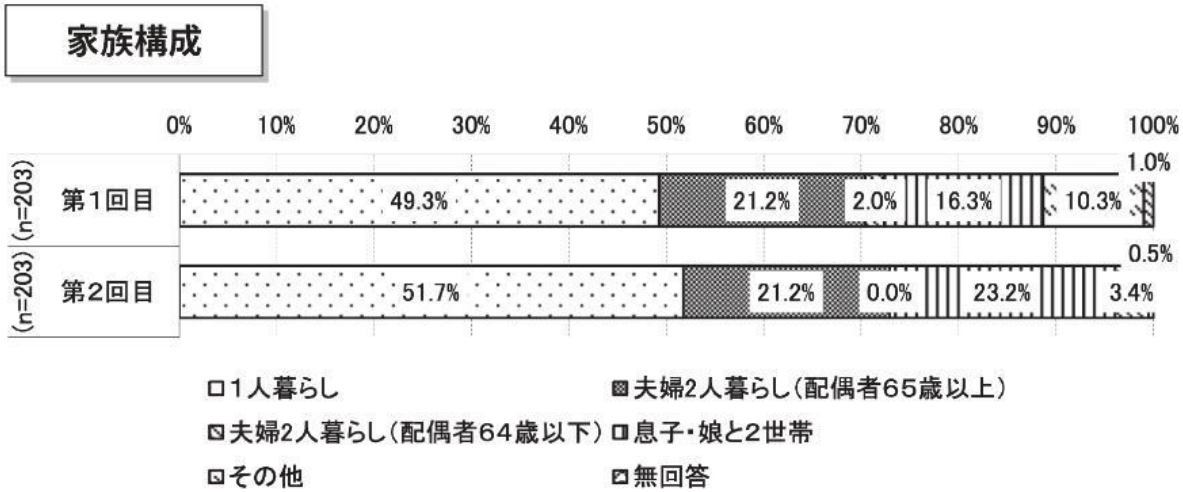
	1・2回目共回答	2回目回答なし	1回目回答
A(利用者)	203人	92人	295人
B(担い手)	94人	35人	129人
合計	297人	127人	424人

アンケート回答者（利用者） 1

n=203



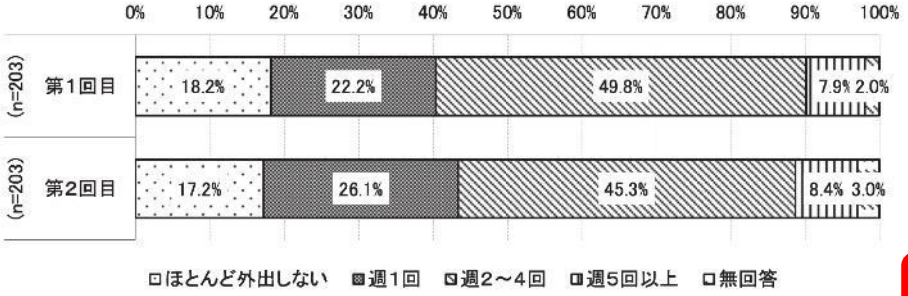




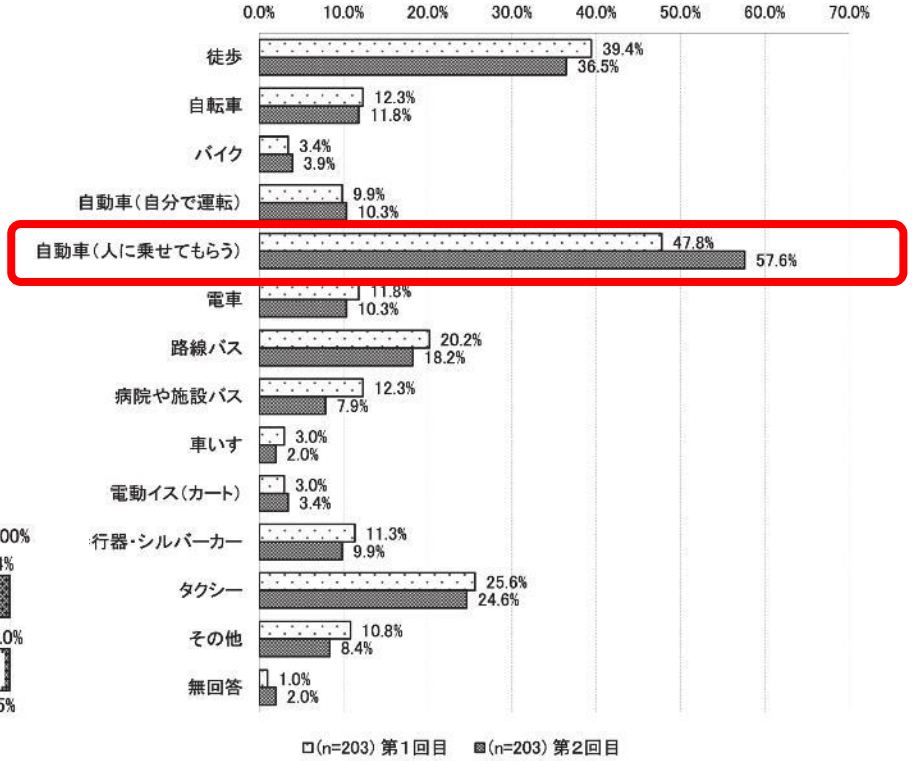
アンケート回答者（利用者）２

n=203

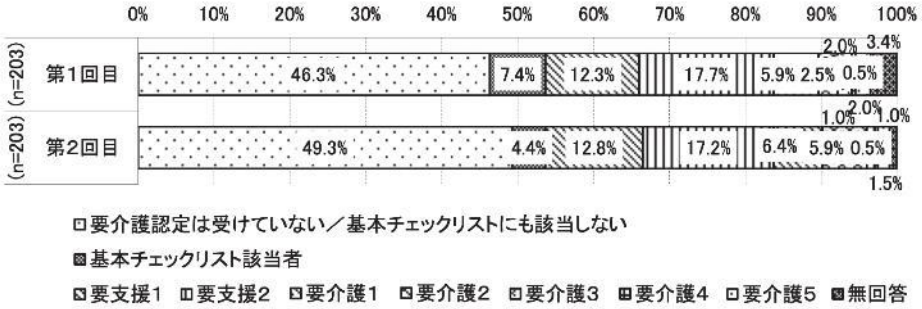
外出頻度



外出するときの移動手段（複数）

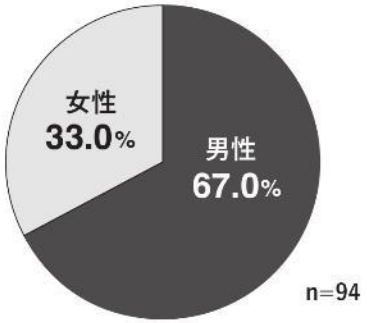


要介護度など

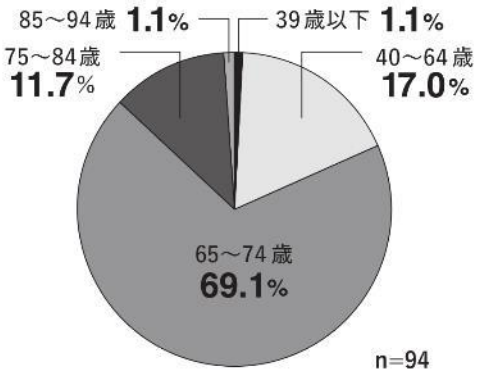


アンケート回答者（担い手）１

n=94

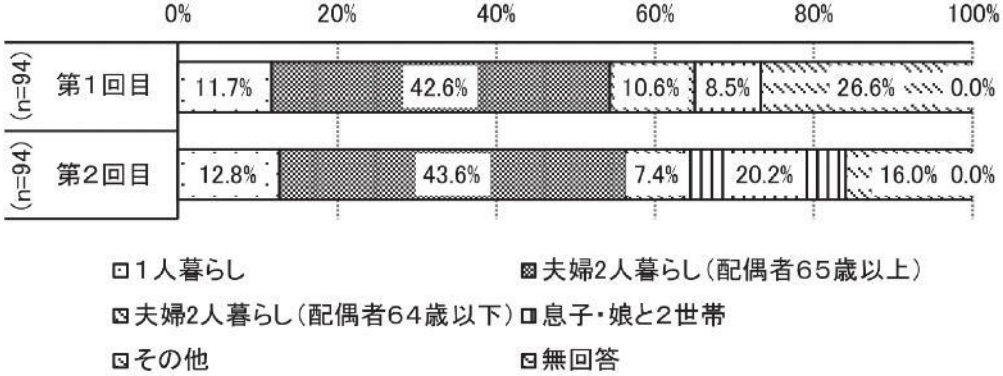


性 別

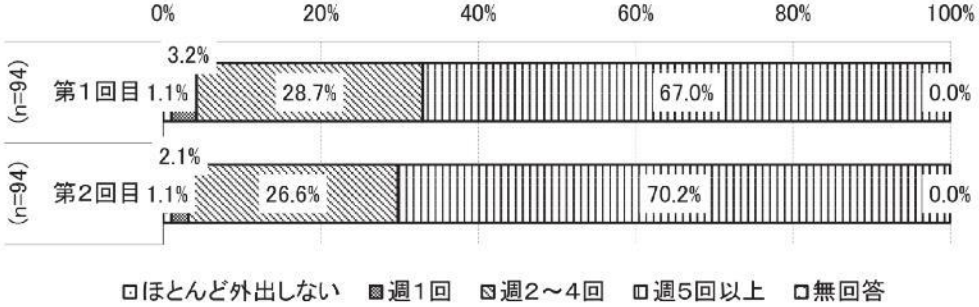


年 齢

家族構成



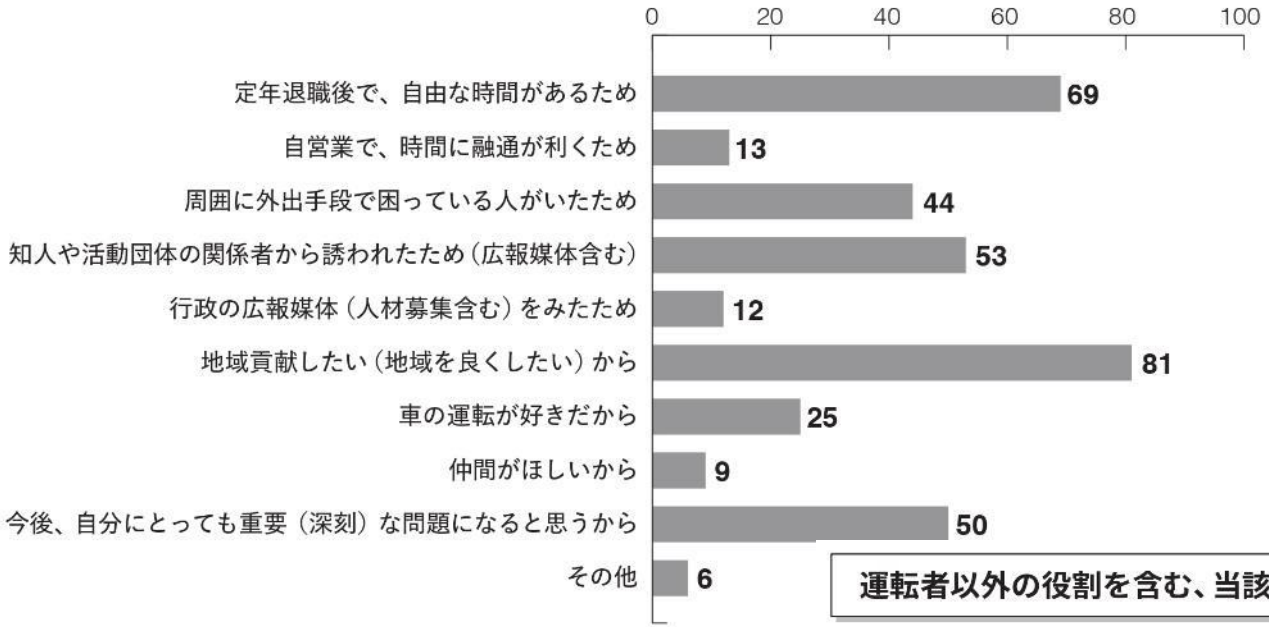
外出頻度



アンケート回答者（担い手）２

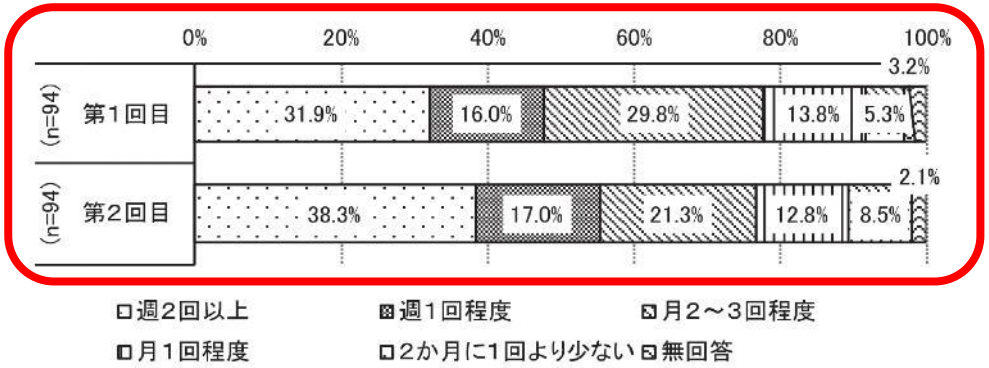
活動に参加した理由（複数）

n=129※1回目のみ



運転者以外の役割を含む、当該団体等の活動への参加頻度

n=94



【住民主体の移動支援が高齢者の介護予防にもたらす効果に関する調査研究】
報告書はこちら（本編、別冊資料集）↓↓

https://www.zenkoku-ido.net/action#action88

利用者および担い手への 心理学的計量尺度を用いた定量的調査の分析結果

＜利用者＞全数、介護度、移動支援の利用頻度、利用目的別で、うつ傾向の平均得点を比較したら・・・

・うつ得点の平均値が8～10ヶ月後には向上。

・自立の場合12.8%、要介護者も7.5%

＜担い手＞全数と参加頻度別でのQOL平均得点を比較したら・・・

・担い手の一定の層にはQOL向上の効果が生じうることを示唆している。

・担い手参加の頻度別では、週2回以上の高頻度参加群のQOL得点が低下した一方で、月1回以下の低頻度参加群では増加していた

「あなたは、現在どの程度幸せですか＆健康ですか」の回答について、利用頻度の違いによる効果測定（二項ロジスティック回帰分析）を行った結果

主観的健康感（n=168）は利用頻度の違いによる効果の違いは認められなかった（p=0.831）。一方、主観的幸福感（n=183）は週2回以上の利用に比して、他の利用頻度（週1回程度（AOR: 0.074）、2か月に1回より少ない（AOR: 0.058））の場合、幸福感が有意に低かった

＜調査２＞　利用者への移動支援の機能に関するヒアリング調査

	市町村名	ヒアリング団体名	種　別
1	埼玉県東秩父村	NPO法人　ふれあいやまびこ会	交通空白地有償運送
2	埼玉県飯能市	NPO法人　奥武蔵グリーンリゾート	交通空白地有償運送
3	神奈川県秦野市	とちくぼ買い物クラブ	登録不要の移動支援
4	神奈川県秦野市	おたすけ隊	登録不要の移動支援
5	静岡県函南町	社会福祉法人　函南町社会福祉協議会「かんなみおでかけサポート」	登録不要の移動支援
6	島根県美郷町	NPO法人　別府安心ネット	福祉有償運送
7	佐賀県小城市	小城市支えあいセンター	登録不要の移動支援
8	千葉県松戸市	河原塚ことぶき会、小金原地区会	登録不要の移動支援
9	三重県名張市	地域づくり組織による生活支援と移動支援	登録不要の移動支援

利用者に対する効果・変化（聞き取り結果）

身体	●サロン後に買い物に寄るなど行動範囲が拡大した。 ●地域の足ができたことで、介護予防教室の新規参加者が増えてきた。
心理認知	●車窓の景色でも気持ちが晴れる。 ●買い物がストレス解消になっている。 ●買い物代行もあるが、とくに女性は自分で選びたいとし、移動支援・付添支援のニーズが高い。 ●移動支援のある日には、きちんと支度をして待つなど、生活リズムができてくる。 ●独居ケースに定期的に移動支援等が入ることにより、部屋を片付けるようになり、居住環境が改善する効果が見られる。
会話	●車中での会話量が増える。特に独居者で顕著。 ●買い物後もベンチで会話に興じている。 ●「一週間分の会話ができた」といった声が聞かれる。 ●宅配も利用するが、宅配には会話がないので、買い物クラブを唯一の会話の機会として利用している。
社会参加	●孤立がちな高齢者のサロン利用が実現し、交流等で前向きになった。 ●服装にも変化が。 ●地区行事等への参加も増え、閉じこもり予防になっている。 ●移動支援や生活支援の利用で介護保険サービスへの移行がブロックできている、と行政は感じている。 ●付添があり、家族が安心して送り出せるようになった。

利用者の効果・変化

個別ケース

移動支援は受け入れられやすい

●認知機能低下が目立つ要支援1の女性

ケアへの拒絶感が大きいことから、地域包括支援センターが「居場所のお手伝い」として、まず移動支援の利用を勧めたところ、デイ（通所Ａ）とは別に、コミュニティカフェを移動支援で利用するようになった。事前連絡や外出等により生活にリズムができるとともに、居場所で顔見知りとの会話、交流を楽しみ、表情が明るくなって、娘への不穏な連絡もなくなるなど、状態も落ち着いてきた。病識がなく、かかりつけ医もいないので、放置されていれば間違いなく症状が悪化し、すぐに施設入所していたレベルなので、財政効果も大きい。利用開始半年後のチェックでは、ＡＤＬも認知機能も維持されていた。娘も、居場所や近隣、専門機関などに見守られていることを喜んでいる。

孤立対策

●夫の遺品整理で依頼が入った孤立気味の女性

同年代の担い手とのかかわりの中で、会話・交流が大事と自覚し、外出するようになり、付添支援（移動支援）を使いはじめた。表情が見違えるようになり、一年ほど経って、生きがいデイも利用するようになった。近隣との付き合いがなお少ないが、ゴミ出しなどの生活支援のほか、買い物支援や100歳体操（一般介護予防事業）なども利用するようになった。孤立気味だったが、明るく前向きになってきた。

こういう人・こういう部分に効いている

移動支援を入り口にほかの支援につなげやすい

●要介護の妻と介護する夫の老夫婦のケース

介護保険の利用を拒絶していたが、通院に移動支援を使い、院内の付添や会計の援助等も頼まれるようになり、担い手および団体への信頼感が高まって、掃除やごみの分別・ごみ出し等の生活支援や介護保険サービスの利用にも拡大した。

誘い出しの機能

●認知機能低下が疑われる女性

前日に通院の準備をし、医師に確認するメモまでつくるものの、当日になって気持ちが萎えてしまう場合がしばしばあるが、担い手が迎えに来て、いざ外出すると、気持ちが晴れ、外出を楽しむことができる、というケースが少なくない。誘い出し機能が、重要である。

利用者からすると、移動支援には誘い出され、ほだされて外出する、という利点がある。

ＱＯＬおよび財政面の効果

●町外医療機関に通院していた統合失調症患者の男性利用者

運転に不安を感じ、通院および買い物に移動支援を利用するようになった。その後、要介護状態の母親の通院にも、移動支援を利用しはじめた。移動支援の担い手が唯一の相談先（行動の規範）となり、表情が劇的に明るくなった。以前は、入退院を繰り返していたが、担い手等とのつながりを介し、精神的に安定した。母親にはパーソナル障害等があり、孤立した世帯だったが、介護・医療にもつながった。

担い手に対する効果・変化（聞き取り結果）

身体	●早起きするなど生活リズムが整った。　●日中の身体活動量が増えた。 ●日頃、ウォーキングをしたり、疲れを残さないように体調管理に気を配るようになった。 ●手術した際には、待っている利用者がいるので、早く復帰しなければと思った。
心理 認知	●適度な緊張感があり、刺激になっている。 ●利用者のスケジュール管理などで頭を使うようになった。 ●車中での会話に備え、時事問題やニュースを頭に入れるようになった。 ●人脈・知り合いが増えた。　●感謝されるので、やりがいがある。 ●助けたいという使命感と愛が原動力になっている。
社会 参加	●協議体にも参加し、地域課題を知り、課題解決の役に立っていると思うと、「やって良かった」と思う。利用者が明るく元気になると、嬉しく思う。 ●当初、利用者のことは近所の顔見知り程度の認識でしかなかったが、今では家族のような気持ちで、欠席だとどうしたのか気になるようになった。地域全体の見守りも、気にするようになった。 ●地域により関心を持つようになった。 ●期待され、地域貢献の意識が高くなった。

とにかく喜ばれる活動！担い手のやりがいがUPする

地域での波及効果

個別ケース

●地区内で産直野菜の直売所がスタートし、最近はこの直売所の後にスーパーマーケットに行くようになった。

●取り組みの趣旨が理解され、特養の法人送迎バス（１日７便）が移動困難者の乗車を認めてくれるようになり、駅まで乗車可能となった（３４人が利用）。

●個人的な移動支援や老人会の買い物代行の取り組み、スーパーマーケットやコープ、「とくし丸」の移動販売などに波及し、地域が活性化してきた。

●買い物支援協力店（宅配、休憩所）などの開始にもつながった。

移動支援が社会資源の拡大・充実のきっかけになる

交通施策の拡充につながる場合も！

効果・変化をもたらす移動支援の機能（個人レベル）

誘い出し機能

社会資源につなぐ機能

信頼関係の構築機能

3つを
あわせると・・・

社会参加の基盤として機能

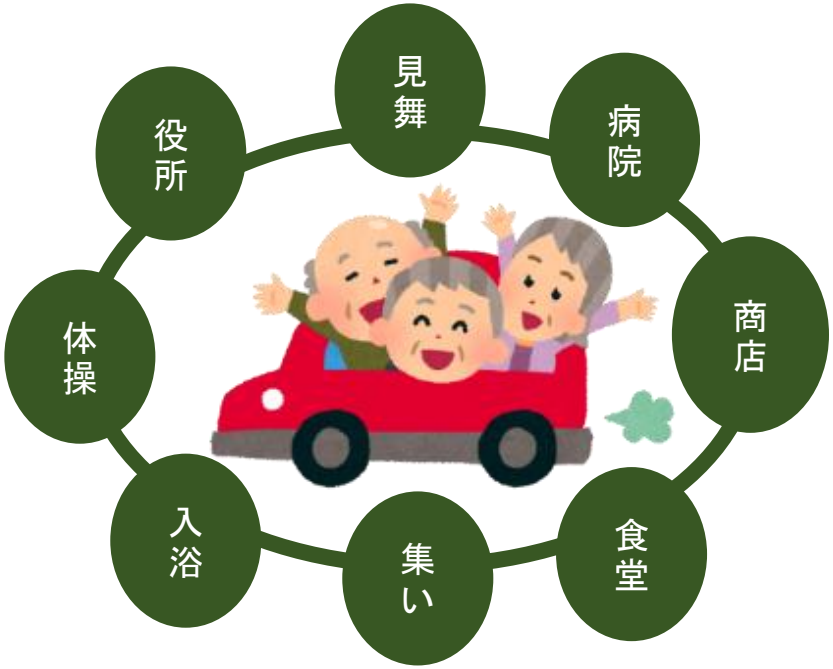
日々の活動では、意外と気づけないので、意識して取り組むことが大事

効果・変化をもたらす移動支援の機能（地域レベル）

地域包括ケアシステムの
一端を担う機能

関係団体や行政などを
緩やかにつなぐ連携・ハブ機能

ソーシャルキャピタルの
醸成機能



活動団体だけが頑張っても、この機能は果たせない
つなぐ機能を活かすと…

「私たちの暮らしはどう変わるの？」
の答えが見えてくる

＜調査３＞移動支援を利用している要支援者等と利用していない要支援者等の変化の比較分析

愛知県豊明市が行う
一般介護予防事業（地域介護予防活動支援事業）「らくらす」

・豊明市は基本チェックリスト該当者等を対象に、半日型アクティビティ（体操、健康講座、体験講座、お出かけ講座等）「らくらす」を週4日実施。

・豊明市社会福祉協議会が市の委託を受けて、市内１箇所（老人福祉センター）で実施しており、老人福祉センターまでの移動手段がない（または不便）な参加者を対象に、送迎車両である「らくらすバス」を運行。

・第７期と第８期の介護保険事業計画の作成に伴い実施された介護予防・日常生活圏域ニーズ調査の結果を使用し、サービスの利用者と非利用者では、主観的幸福感にどのような違いがあるかを解析した。

送迎つき「らくらす」参加者と「らくらす」不参加者の主観的幸福感の維持・向上について比較した結果

	B	標準誤差	有意確率	オッズ比
説明変数				
2019年「らくらす事業」への参加	2.212	1.058	0.037	9.132
調整変数				
2016年「らくらす事業」への参加	-0.476	0.456	0.296	0.621
性別（男性）	-0.094	0.082	0.255	0.911
年齢（65～69歳）（参照）			0.656	
年齢（70～74歳）	-0.397	0.382	0.298	0.672
年齢（75～79歳）	-0.476	0.379	0.209	0.621
年齢（80～84歳）	-0.349	0.379	0.358	0.706
年齢（85～89歳）	-0.46	0.382	0.229	0.632
年齢（90歳以上）	-0.519	0.396	0.19	0.595
家族構成（1人暮らし）	0.019	0.118	0.87	1.02
手助け・介助が必要か（必要）	-0.283	0.139	0.042	0.754
経済状況（よい）	0.283	0.093	0.002	1.327
１人での外出（できる）	0.079	0.198	0.691	1.082
現在治療中、または後遺症のある病気（あり）	0.085	0.103	0.405	1.089

調査分析に必要なデータを持っている自治体がない

＜結果＞

らくらす事業への参加者は、主観的幸福感が有意に良い状態にあることが明らかになった。身体的な病気の治療とは別に、らくらす事業のような目的地までの移動支援も含めた介護予防事業への参加を通じて、精神的に良好な状態を保つことは、健康寿命の延伸を達成するためのもう 1つの方法だと考えられる。

まとめ

●移動支援を利用すると、うつ傾向の改善が期待できる
●移動支援の担い手として参加すると、QOLの向上が期待できる
●週2回以上のサービス利用が主観的幸福感の向上に寄与する

●移動支援の利用者に、行動範囲の拡大、生活意欲の刺激、会話量の増加などが見られる
●移動支援の担い手に、健康意識の高まり、思考力や課題意識の向上、やりがいの上昇が見られる（調査２）
⇒「誘い出し機能」「信頼関係の構築機能」「つなぐ機能」による

●介護予防の取組は、送迎が付いていることで、主観的幸福感が向上する

つまづいたとき、迷子になったとき、仲間がほしいとき
まず、できていることを「見える化」しよう
つながりたい人や組織に伝えていこう